

KUNI BO

MAGAZINE

vol.00

香川が生んだ
マルチクリエイター
和田邦坊

時事漫画家

小説家

農業学校の教員

讃岐民芸館初代館長

商業プロデューサー

デザイナー

画家

特集

和田邦坊
ビギナーズブック

TAKE
FREE

香川のデザインは邦坊のデザイン

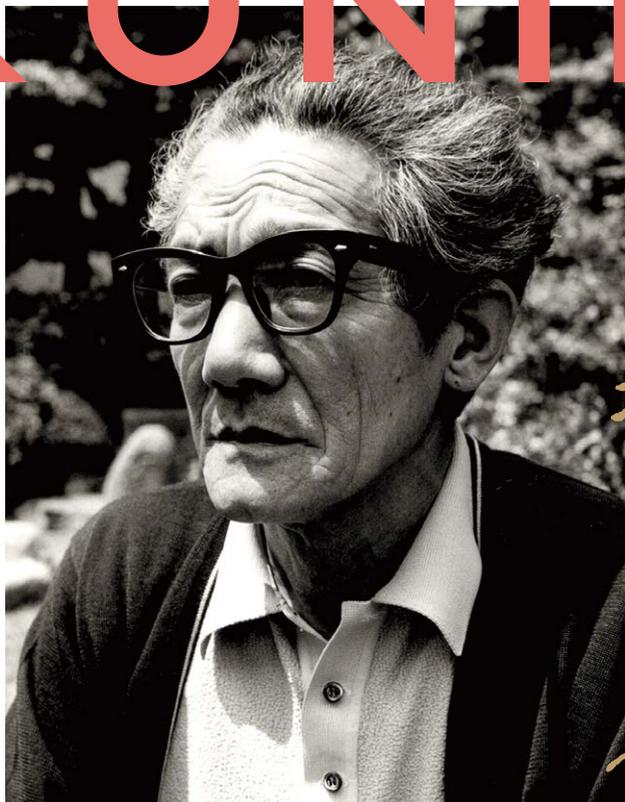
OWADA

時事漫画家、小説家、農業学校の教員、讃岐民芸館の初代館長、デザイナー、商業プロデューサー、画家など多彩な活躍をした邦坊は、どの時代や分野に注目しても興味関心の話題が尽きません。ですが、まずは誰もが知る、そして知らない人には知ってほしい邦坊の代表作をご紹介します。また、駅や空港などの土産物売り場に行くと、見たことも食べたこともある邦坊デザインの商品がずらりと並んでいます。懐かしいお菓子は、思い出の故郷の味、田舎の素朴さ、香川らしさがギュギュッと詰め込まれています。邦坊の手柄や生き方を知ると、商品を買うときのヒントになるだけでなく土産を渡すときの楽しみにも繋がるはずです。つきまして、このマガジンが県内外の皆さんのコミュニケーションを楽しめるツールとして役立てば幸いです。また願わくば、うどんのように太く長くコシあるマガジンとして次号も発行できますように……。

好評につき
増刷決定!



KUNIBO



和田邦坊

香川県出身の和田邦坊（1899—1992）は、時事漫画家、小説家、商業プロデューサー、讃岐民芸館館長、デザイナー、画家として活躍した人物です。代表作は、お札を燃やしている船成金の風刺漫画、小説「うちの女房にや髭がある」など。戦後は、香川県民であれば誰もが知る物産品の数々をデザインし「香川のデザインは邦坊のデザイン」と謳われる時代を作り上げました。

画家としての活躍もあり、デザイナーの剣持勇から依頼を受けて制作した障壁画《讃岐の松》は、現在も知事応接室に展示されており県民の目にも馴染み深い作品です。障壁画をみた版画家・棟方志功は「香川県庁大広間の和田邦坊画伯の大画業は今世の絶大に数えられるべきものと感嘆やまないことです」と絶賛しています。また、彫刻家のイサム・ノグチも「邦坊さんの絵それは日本の神様が遊んでいる形です」と表現し、世界的アーティストたちからも支持された画業を残しています。

成金栄華時代



《成金栄華時代》『現代漫画大観 第3編』中央美術社 昭和3年

「暗くてお靴が分からないわ」
「どうだ明るくなっただろう」

というセリフも有名な作品です。紙幣を燃やすふくよかな男性は、第一次世界大戦後に造船業で成功した実業家（船成金）を風刺して描いています。実際に船成金が登場した時代に描いた作品ではなく、昭和3年に刊行した『現代漫画大観』（全10巻）のために描き下ろした扉絵になります。漫画大観の第3巻は、明治・大正の歴史を漫画で振り返るテーマになっており、邦坊は扉絵だけでなく大正8年～9年に起こった歴史的事件（日本初の国勢調査や板垣の訃報など）を担当しています。

発表して90年以上経ちますが、今でも歴史の教科書だけでなく様々なメディアで登場することが多く、知る人ぞ知る邦坊の代表作です。本人にとっては自信作ではなかったようですが、お札を燃やすおじさんはSNSでも話題を集めており令和の時代でも活躍が続いています。紙幣を燃やすトンデモナイおじさんですが、どこか憎めない表情。邦坊のユーモアセンスが光る作品です。

ウチの女房にや髭がある



『ウチの女房にや髭がある』新陽社 昭和11年

今でこそ《成金栄華時代》の知名度は抜群ですが、戦前・戦後の邦坊といえば小説『ウチの女房にや髭がある』が代表作として有名でした。邦坊は、時事漫画家として東京日日新聞（現毎日新聞）に就職していましたが、漫画だけでなく文章も面白いと話題となり小説家としても活躍。毎月、山のようなファンレターが届くほど人気作家となり《ウチの女房にや髭がある》は、映画化するほど人気を集めました。また、同名の主題歌も大ヒットし、昭和を代表する歌謡曲として歌い継がれています。しかし、原作と映画では主人公の名前もストーリーも全く違ってきます。どうやら「女房にや髭がある」という奇想天外なネーミングが一人歩きしてしまったようです。原作もカリア天下のドタバタ劇ではありませんが、物語の終盤では「良人は髭を生やして威張らないで、女房にも髭があると思へ」というセリフが登場します。「女房にや髭がある」は、カリア天下の様子を面白おかしく表現したのではなく、男女同等の権利を論ずるという伏線が隠されています。当時の世相をみても斬新な展開であり、邦坊独自の鋭い見識を垣間みることができます。



《讃岐の松》香川県庁舎本館知事応接室／障壁画（縦223cm横／875cm）昭和32年

讃岐の松

建築家・丹下健三が設計した香川県庁舎（現・東館）の竣工に合わせて描き下ろした作品。邦坊は、デザイナー・剣持勇から依頼され栗林公園の北館でこの5枚1組の大作を仕上げたといえます。描かれているのは白砂青松の景勝地・津田の松原（さぬき市）です。刷毛のような大きな筆で荒々しく松の幹を描き、筆の勢いで墨が飛び散った跡さえも松葉の力強い表現となり、細部にわたり躍動感に溢れています。また、長い風雨によって露出した根上り松は、風格ある佇まいでありながら今にも動きだしそうな厚重な雰囲気を感じさせています。来客を招く応接室のなかで大きな存在感を放ち、黒一色の力強い筆墨は見るものを圧倒させる大作です。まさに邦坊の代表作であり、香川県の品格を象徴する作品といえます。



2021年、香川県庁舎（東館）は重要文化財になりました！ もともと障壁画は東館5階の知事特別応接室の設えでしたが、現在は隣の新庁舎にあります。



長寿手帳

母子健康手帳

長寿手帳は、香川県が発行している福祉手帳です。表紙の題字は、邦坊の文字で「君不老如花」と書いており、いつでも花のように美しく若々しくあつてほしいという願いを込めています。

現在は手帳タイプではなく2つ折りのカードになっていますが、表紙は変わらず邦坊のデザインが採用されています。また、落款もサインもないのであまり知られていませんが、昭和50年代に発行していた母子手帳も邦坊のデザインになります。このように何気なく生活で使っていたものを見わたすと、邦坊のデザインは香川県民の様々な暮らしなかに寄り添っていたことが分かります。



長寿手帳 昭和47年
母子健康手帳 昭和50年代



香川のデザインは

邦坊のデザイン

邦坊の名前は知らなくてもあれもこれも和田邦坊といえるほど香川県の物産品デザインは邦坊の作品で溢れています。邦坊は昭和57年、日本パッケージデザイン特別賞を受賞。また、平成8年フィラデルフィア美術館が企画した展覧会に邦坊がデザインした紙袋が出展されるなど世界デビューを果たしています。

邦坊のデザインは、香川らしさを追求したものでした。自身も「東京の生活が長かったので讃岐の良さ、弱さは心得ている」と話しており、香川を離れていたからこそ見えてくるものがあつたようです。また「観光香川だけに、都会の人が見ても「いいなあ」と力説し、民芸の考え方を取り入れながら、香川のイメージをデザインに落とし込んでいくようになりました。パッケージデザインは、香川の観光地・名勝地、伝説、まつり、文化など様々な題材がモチーフになっています。地元の人にとっては、懐かしく誇りの持てるデザインに。県外の人にとっては、香川らしさを裏切らないデザインに。また、方言は香川の個性として「ざいご(田舎)」や「ひょうげ(おどける)」などを商品名やキャッチコピーに取り入れています。

マッチ箱は、木版画で仕上げた贅沢な設えになっており、手のひらサイズの和田邦坊作品として愛でることができます。また、葉はお菓子の由来やカードのように商品に添えられています。お菓子を食べながら、一読一笑していただきたいデザインばかりです。

小さきものは可愛い — マッチ箱 — MATCH BOX



お菓子の添える — 葉 — STORY CARD



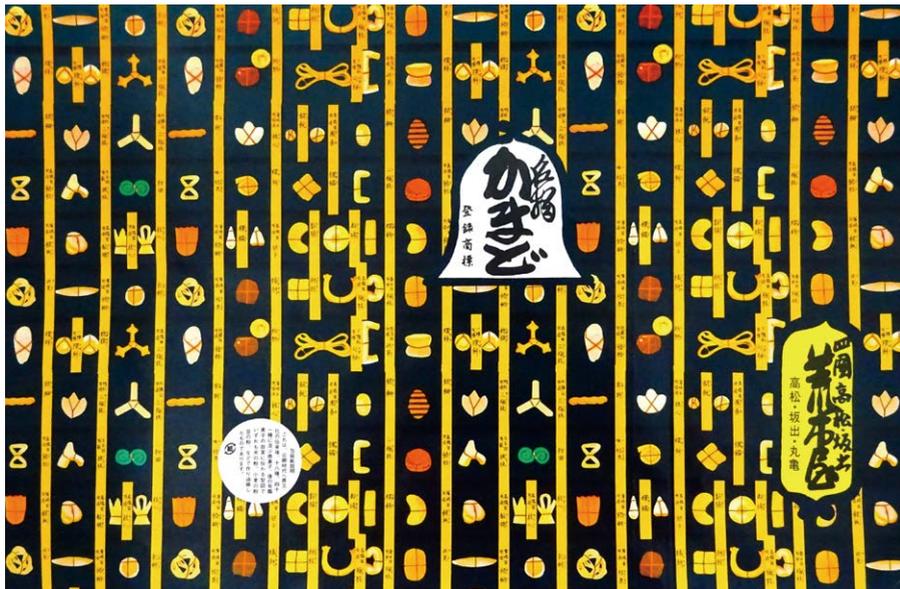
1 民芸福や(琴平町) 2 撫松庵(琴平町) 3,14 灸まん(琴平町) 4,5,8,9 名物かまど(坂出市) 6 たこ寿司(琴平町) 7 フリランツ(高松市) 10 巴堂(高松市・東かがわ市) 11 豆芳(高松市) 12 へんこつ屋(琴平町) 13 吉岡源平餅(高松市)



灸まん(琴平町) 琴平の本物の土産物を作りたい! という意気込みに応えて邦坊がデザインした包装紙。あえて洗練された美しいデザインではなく、都会の観光客が求める香川のイメージに合わせて田舎らしい色合いや文字のデザインで売り出しました。



ひょうげ豆(高松市)香川県の奇祭「ひょうげまつり」を題材にした豆菓子の包装紙。讃岐弁の「ひょうげる(おどける)」を活かして個性的な商品名をつけています。また、仮装した人々をカラフルな色彩で描くことで他の商品よりもひと際目立つデザインに仕上がっています。



名物かまど(坂出市)東京国立博物館が所蔵する「有職菓子模造(ゆうそくかしもぞう)」という和菓子の模型をモチーフにした包装紙。日本最古の和菓子を描くことで、歴史あるお菓子になるように願いを託したのかも知れません。



ぶどう餅(東かがわ市)巴堂の看板商品「ぶどう餅」の包装紙。団子の形が映える赤色は、戦勝祈願の“武道餅”の由来に合わせて武器甲冑の朱をイメージしています。また、商品棚に陳列すると店の雰囲気バツと明るくなり内装と合わせた色の効果も注目できます。



香川に民芸館が出来ました。
しかも栗林公園の緑陰の間に、
白壁の粹を利かせた洒落れな建物で――

観覧時間 午前8時30分～午後4時30分

四国・高松・栗林公園内

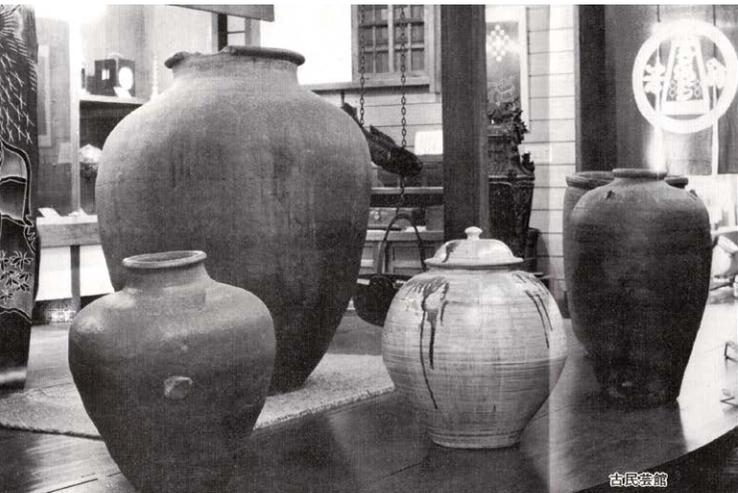
讃岐民芸館

香川県栗林公園観光事務所
電話 087-744-1140

讃岐民芸館

讃岐民芸館

昭和29年、邦坊は当時の県知事・金子正則の招聘を受けて栗林公園内にある商工奨励館で働くようになりま。御年55歳でしたが、ここから新たな邦坊の活躍が始まります。邦坊に期待された大きな仕事は、まず栗林公園に民芸館を作ることでした。「民芸」とは、柳宗悦が提唱した思想で日常雑器から「用の美」を見出すという考え方です。当時多くの人たちが支持した民芸運動ですが、讃岐民芸館は柳の思想から離れた民芸協団から支援を受けて設立しました。また、地元の民芸品だけでなく讃岐の人たちの目利きによって選ばれ、そして使われてきたモノを蒐集・展示しており全国にある民芸館とは違う独自のスタイルを生み出しています。そして、なにより特徴的な活動は、邦坊が民芸品の新しい販路や開発に取り組み、自身のデザインとコラボレーションさせた新しい民芸品（新民芸）の製作に尽力したことです。邦坊自身も生粋の讃岐人。その鑑識眼をフルに活用した「讃岐民芸」の新展開を実践していたのです。



古民芸館



新民芸館

讃岐民芸館

讃岐民芸館は、水い伝義と独特な手仕事で今なお作りつづけられている讃岐民芸品と、ながい年月のあいだに讃岐の風土人情にマッチして讃岐人の生活の中にとけこんできた生活雑器をも、この土地の民芸品としてとりあげました。この意味で、この讃岐民芸館は全園的な民芸品の集取ではなく、讃岐人の生活の知恵が凝り出した民芸館であります。



写館

Sanuki Folkcraft House

Exhibited here are such folkcraft as has been and is still being manufactured by the traditional techniques native to this locality and other articles that have been in daily use for their fine adaptability to the local climate and human feelings.

Visitors, therefore, are kindly advised not to expect to find here a complete folkcraft collection from other parts of Japan.



家具館



館長室で煙草を吸う邦坊 (昭和48年)

敷地内にある館長室は、邦坊のアトリエとして使われていました。ここには金子知事もよく立ち寄り、様々な来客をもてなすサロンのような場として親しまれていました。邦坊は、館長室のことを「おもちゃ箱のような部屋」と話しています。

讃岐民芸館は、古民芸館・新民芸館・家具館・瓦館の4館で構成されていました。展示物も魅力的ですが、見どころはそれだけではありません。まず、蔵行燈をモチーフにした内装や照明器具、瓦タイルで作った外壁の意匠、そして建物の入り口に掲げた扁額の文字は邦坊がデザインを手掛けています。また、建物の設計は建築家・山本忠司(当時は県職員)が担当し、古民芸館にある中庭は昭和の小堀遠州といわれた中根金作が作庭しています。大きな展示台は家具メーカーの桜製作所が作っており、敷地内にある行燈のオブジェは彫刻家・流政之の作品になります。このように、讃岐民芸館の設立には邦坊だけでなく一流のクリエーターたちが集結しており、香川県の文化・芸術に対する勢いを感じることができます。

鯉飛ぶ

昭和44年（1969） 飾り団扇



大きく目を見開いて、大きな口をあけた鯉。しぶきをあげて飛び出すような姿に圧倒される作品です。扇ぐ団扇ではなく飾って楽しむ調度品として考案されており、扇面には手刷りの木版画を贅沢に使っています。自身のデザインと香川を代表する丸亀団扇を組み合わせて新しい商品価値を生み出し、茶会の土産物としても話題を集めた作品です。

おどぼけ人形

昭和40年代 張子玩具



かんがえるおやじ

おどるおやじ

セリフを忘れた役者

邦坊がキャラクターデザインをした張子人形。香川を代表するお土産物を作ろう！という企画で全10種類のゆるキャラが誕生しました。何ともいえないフォルムですが、実は土器川の石を型にしており、人形の素朴さをさらに魅力的にしています。また、ストレス社会を生きる現代人に向けて「もっととほけて生きていこう！」というメッセージも禁に綴っています。

風、雷、雨

昭和30年代 風呂敷



茶会の土産物として贈呈していた風呂敷です。子供のように愛らしい風神、雷神、雨の神様をデザインしています。単調なモノクロームの色調ですが、それぞれが風、雷、雨を呼んでいるような楽しい雰囲気伝わってきます。風神雷神という定番の画題に雨の神様も描いている点が香川らしさであり、故郷を想う邦坊らしさを感じとることができます。



和暦	西暦	年齢	略歴
明治32年	1899	0歳	8月24日、ジャーナリストの父・和田菊処の長男(本名・邦夫)として香川県琴平町に生まれる。
明治39年	1906	7歳	高松市立四番丁尋常小学校入学。算数が得意な少年時代を過ごす。
大正元年	1912	13歳	香川県立高松中学校(現高松高校)入学。蓄膿症にかかったことで学業に挫折、卒業前に中退する。同級生とともに家出して岡田三郎助が主催する本郷洋画研究所に入所するが、洋画に興味が持てず夢半ばで帰郷。漫画家の近藤浩一路や岡本一平、そして父親の仕事に影響を受けて新聞業界に興味を持ち始める。
大正11年	1922	23歳	地元の有力者の紹介でプラトン社に入社。『女性』『苦楽』の雑誌編集を手掛けながら漫画を連載する。
昭和4年	1929	30歳	香川県出身の政治家・三土忠造からの紹介状を持参し東京日日新聞(現毎日新聞)の採用試験を受ける。得意の論語を武器にして渋沢栄一の取材に成功し、無事に入社を果たす。
昭和13年	1938	39歳	時事漫画家のバイオニア岡本一平(芸術家・岡本太郎の父)のライバルといわれ「朝日の一平、東日の邦坊」と謳われる。小説家としてもデビューし『ウチの女房にゃ髭がある』は映画化し主題歌も大ヒットする。新聞だけでなく雑誌の連載も数多く持つようになり多忙な生活が続く。体調に限界を感じて帰郷することを決断する。
昭和16年	1941	42歳	香川県立農事講習所(琴平町榎井)の講師として勤務。絵の指導をしながら、農業教育の普及に尽力する。
昭和29年	1954	55歳	香川県商工奨励館にて嘱託職員として勤務。讃岐民芸館の開館準備や県内の企業のデザイン指導を行う。
昭和39年	1964	65歳	11月3日「文化の日」に県文化功労者(日本画)として知事表彰される。
昭和40年	1965	66歳	讃岐民芸館、開館。初代館長に就任する。版画家・棟方志功と親交が始まる。
昭和41年	1966	67歳	四国新聞文化賞(画家)を受賞。
昭和47年	1972	73歳	個展「和田邦坊展」(香川県文化会館)を開催。彫刻家のイサム・ノグチから「邦坊さんの絵 それは日本の神様が遊んでいる形です」と祝辞を受ける。棟方からも海外での発表も勧められたが頑なに固辞する。
昭和57年	1982	83歳	日本パッケージデザイン協会/特別賞を受賞。「永い間、ユニークなイラストとパッケージの制作にあたって、高松でのひとつの雰囲気をつくりあげている」という評価を受ける。
昭和59年	1984	85歳	脳血栓の再発、闘病生活が始まる。
平成4年	1992	93歳	11月7日 和田邦坊、永眠。

KUNI BO

MAGAZINE



KUNIBO MAGAZINE vol.00

発行年：2022年2月7日 第1版発行、2022年10月1日 第2版発行

発行：(公財)高松観光コンベンション・ビューロー

助成：香川県魅力ある観光コンテンツ造成支援事業

協力：灸まん美術館／和田邦坊画業館

制作：和田邦坊リサーチプロジェクト 西谷美紀

デザイン：大池 翼 写真：宮脇慎太郎 (P5～P7、裏表紙)

表紙《ワイドパンツを着こなす和田邦坊》年代不明
裏表紙《香川KAGAWA》観光ポスター・昭和30年代

※掲載した作品・写真画像はすべて著作権を管理する灸まん美術館から提供を受けました

